

モーリシャス

アフリカらしからぬ小国の素顔

寺谷亮司

はじめに

—地図にない国—

手元の最新地図帳（『高等地図帳2001-02』二宮書店）を開いて、アフリカ大陸のページ（16～17ページ）を見ても、記載されていないアフリカの国がある。それが、マダガスカル東方のインド洋上に浮かぶ島嶼国家モーリシャスである。国土面積はほぼ東京都と同じ2040平方キロ、1999年末の総人口は118万912人であり、主島のモーリシャス島が、国土面積の91%、人口の97%を占める。現在の民族構成は、インド系68%、クレオール（アフリカ系混血）23%、中国系3%、フランス系2%などであり、アジア系が卓越する。輸出加工区（EPZ）の成功などにより、97年の国民1人当たりGNPは4230米ドル（『世界開発報告1998/99』）であり、これはセイシェル、ガボンに次いでアフリカ諸国中第3位の高い数値である。このように、モーリシャスはアフリカらしくないアフリカの小国であり、これまで日本におけるアフリカ研究者に注目されることは少なかった。

筆者は、財務省の開発経済学調査派遣によって、昨年の10月から今年の2月まで、モーリシャス大

学に滞在し、都市地理学的調査および各種産業調査をする機会を得た。本稿では、モーリシャス滞在の雑感を踏まえ、モーリシャスにおける経済・産業動向や人文・社会特性の概括的紹介を行いたい。

1 経済の概観

—三つの基幹産業—

モーリシャスの繊維産業の中心地フローリアル（Floreale）の繊維博物館に入ると、まず3枚のパネル写真が目飛び込んでくる。左側の1枚には1人の農夫がサトウキビを手で刈取っているサトウキビ畑、真ん中の1枚にはビーチチェアとトロピカルドリンクの向こうに青いラグーンが広がるリゾートビーチ、右側の1枚には多くの女工さんが機械紡ぎをしているニット工場内部の光景が映し出されている。これらは、現在のモーリシャスの基幹産業が、砂糖産業、観光産業、輸出加工区製造業であることを物語っている。

モーリシャスにおける独立（1968年）以後の経済成長をみると、アフリカ諸国としては異例ともいえる着実かつ高率の経済発展を遂げてきた。年平均GDP成長率は、オイルショックの影響とみな

し得る2年次(75, 80年)を除けばプラス成長であり、しかもほとんどの年次で5%以上の高率を示す。経済成長を支えてきたのは輸出の堅調な増加である。モーリシャスの輸出入合計額はGDPとほぼ同規模かあるいはそれを上回る規模で推移してきており、モーリシャスの貿易依存度は高い。

輸出の品目構成の推移をみると、かつては砂糖が唯一の貿易品であった(表1)。砂糖が全輸出額に占める割合は、1975年までは85%以上であったが、84年には前年の63.4%から一気に49.8%にまで急減し、99年の当該比率は21.11%である。砂糖とは対照的に、輸出加工区の輸出額割合は、71年のわずか1.1%から、75年10%台、81年30%台、86年50%台、93年70%台へと、短期間に急速にそのウエイトを増加させてきた。輸出相手国をみると、70年代はイギリスが約8割を占めていたが、80年代以降フランスおよびアメリカ合衆国への輸出が増加し、これら3国で輸出額のほぼ3分の2を占める。

産業高度化の進展度合を、1975年と2000年のGDPの産業別構成の変化で確認すると、サトウキビ栽培を中心とする第1次産業は、33.5%から6.5%へ急減したのに対し、製造業などの第2次産業は25.4%から29.5%、ホテル・レストラン業などの第3次産業は41.1%から63.9%へ増加した。また、99年における産業別就業人口構成は、第1次産業11.3%、第2次産業37.9%、第3次50.8%である。

1980年代の高度経済成長によって、90年におけるモーリシャスの失業率はわずかに2.8%であり、ほぼ完全雇用を達成した。しかしその一方で、90年代に入ると、モーリシャス人の賃金上昇および労働力不足が顕著となり、中国などからの出稼ぎ労働者が急増している。その数は、90年は約1000人であったが、98年には1万人を超え、2000年は

表1 モーリシャスにおける輸出品目構成の推移 (%)

年次	輸出加工区	砂糖	廃糖蜜	茶	切花	その他
1970	0.0	90.7	2.9	2.9	n.a.	2.7
1971	1.1	87.9	2.5	4.8	n.a.	3.7
1972	2.1	89.8	2.5	3.7	n.a.	1.9
1973	6.2	82.5	5.4	2.6	n.a.	3.3
1974	7.7	86.8	2.5	1.1	n.a.	1.8
1975	10.9	85.2	1.3	0.9	n.a.	1.7
1976	17.8	76.2	1.8	1.7	n.a.	2.5
1977	21.6	70.9	2.0	2.2	n.a.	3.3
1978	24.8	66.8	1.7	2.9	n.a.	3.7
1979	26.0	66.8	2.9	1.6	n.a.	2.7
1980	26.1	66.5	3.2	1.3	n.a.	3.0
1981	37.2	55.6	3.8	1.7	n.a.	1.8
1982	31.7	63.2	1.7	1.7	n.a.	1.7
1983	30.9	63.4	1.5	2.3	n.a.	1.8
1984	42.5	49.8	1.2	4.9	n.a.	1.6
1985	49.9	43.8	1.4	2.7	n.a.	2.2
1986	55.5	39.8	1.0	1.2	n.a.	2.5
1987	57.9	38.2	0.7	0.8	n.a.	2.4
1988	61.8	33.8	0.7	0.7	n.a.	3.0
1989	62.3	34.0	0.5	0.6	0.3	2.3
1990	66.1	30.2	0.6	0.5	0.4	2.2
1991	67.1	29.3	0.5	0.5	0.4	2.2
1992	66.5	29.7	0.5	0.5	0.4	2.5
1993	70.5	25.7	0.4	0.5	0.5	2.4
1994	71.3	24.8	0.5	0.4	0.5	2.6
1995	70.8	24.5	0.5	0.2	0.5	3.4
1996	68.2	27.1	0.4	0.1	0.4	3.8
1997	72.3	23.5	0.3	0.0	0.4	3.5
1998	69.1	23.6	0.2	0.0	0.3	6.9
1999	76.4	21.1	0.0	0.0	0.4	2.0

(注) ただし、1999年の数値は推計値。

(出所) Central Statistical Office, *Annual Digest of Statistics*, 各年; *Bi-Annual Digest of Statistics*, 各年。

1万4600人となった。実際、私が乗った香港からのモーリシャス航空機は、その乗客のほとんどが中国人の出稼ぎ女工さんで占められ、その特異な雰囲気には驚いた。



ベル・ヴィー製糖工場の外観——(正面および右側が製糖工場部門であり、1999年の砂糖生産量は26万6836トンで国内13工場中第5位、左側がサトウキビの搾りかす(Bagasse)を原料とする火力発電所、手前の道路脇には搬入途中にこぼれ落ちたサトウキビが散乱)

2 サトウキビ農業

—島を覆う緑の絨毯—

モーリシャスにおけるサトウキビ栽培は、1639年オランダ総督によってジャワから導入され、その後のフランスそしてイギリス統治下のもと拡大した。とりわけ、1829年以降、労働力としてのインド人契約移民が来住し、国民の民族構成を大きく変えた。

モーリシャスの土地利用の約半分は農地であり、サトウキビ畑は農地の95%以上を占める。最近5カ年間(1994~99年)の農地実面積の変化をみると、サトウキビ畑は茶畑やタバコ畑からの転換によって、むしろ微増傾向にある(7万7467畝→7万8021畝)。このように、モーリシャスの卓越景観といえば、サトウキビ畑であり、長さ100メートル以上の可動式センター・ピポット施設やスプリンクラーが散水する光景である。空からみれば、サトウキビ畑は「島を覆う緑のカーペット」である。

モーリシャスにおけるサトウキビ農業は、畑の

所有形態や経営主体によって、大手製糖業者の経営になる大農園、多くがインド人農家の経営による小作農家および自作農家の三つに区分される。

1999年における経営体数は、大農園13、小作農家707、自作農家2万6967である。同年の経営体別の経営状況を見ると、収穫面積では大農園が45.8%、小作農家が1.5%、自作農家が52.7%を占め、自作農家が過半に達する。しかし、1畝当たりの平均収量をみると、大農園の66.3トに対して、自作農家は42.9ト、小作農家は39.6トにすぎず、収穫量シェアでは、大農園約6割、自作農家約4割となり、シェアが逆転する。このように、モーリシャスのサトウキビ農業は大農園と零細農家によって担われており、両者間の経営規模や経営効率の格差はきわめて大きい。

3 製糖業

—悩める巨人—

モーリシャス滞在がほぼ1カ月を過ぎた頃、サトウキビの収穫はピークとなり、見通しの悪かった通学路の景観は一変した。モーリシャスの製糖

工場の平均的稼働期間は、通常7月末から11月末であり、1999年における平均稼働日数は106日である。私が住んでいたカトルボーン (Quatre Bornes) のフラットから、モー・デザート・アルマ (Mon Desert Alma) 製糖工場の煙が見えなくなり、慌てて稼働中の工場を探し、12月1日に北部最大のベル・ヴィー (Belle Vue) 製糖工場を見学した (写真)。

砂糖の製造および流通工程の概要は下記のとおりである。(1) 大型クレーンでサトウキビを工場内に搬入し、粉碎して搾汁機で搾汁する (搾汁工程)。(2) 蒸発器、真空釜でサトウキビジュースの水分を蒸発させる (蒸発工程)。(3) 晶析装置、遠心分離機で砂糖を結晶化させる (晶化工程)。(4) 砂糖を袋に1トン詰めし、トラックでポートルイス港の輸出用砂糖貯蔵・積み込み施設へ運搬する。

このように、製糖業は、大規模装置産業であり、その多くはフランス人系資本の大企業によって経営されている。モーリシャスにおける製糖工場数をみると、1860年頃の約300場をピークとして、19世紀末約100場、1920年に約50場となり、70年以降は約20場で推移してきた。しかし、98年に1場、99年に3場が閉鎖され、現在の工場数は13場となった。13工場による99年の生産概要は、原料サトウキビ411万4229トンによって、37万3294トンの砂糖が生産された。

砂糖産業に関わる情勢としては、世界市場における砂糖市場価格の低下傾向があり、また国際市場の約3倍もの保証価格を享受しているEC諸国との砂糖協定の見直しの問題は特に深刻である。このため、製糖工場のさらなる合理化の必要性が叫ばれており、2001年の2、3月頃には、南ア共和国の製糖業資本イルボ (Illovo) 社による島南部3工場の買収の動きが盛んに報じられていた。

表2 輸出加工区における企業数、雇用者数、輸出入額の推移

年次	企業数	雇用者数	輸出額 (100万ルビー)	輸入額 (100万ルビー)
1971	9	644	4	n.a.
1972	19	2,588	12	n.a.
1973	32	5,800	45	n.a.
1974	45	8,970	136	n.a.
1975	66	10,267	196	n.a.
1976	85	17,163	309	273
1977	89	18,169	433	302
1978	85	17,740	485	340
1979	94	20,421	620	395
1980	101	22,002	894	658
1981	107	23,601	1,087	682
1982	115	23,476	1,236	742
1983	146	25,526	1,307	847
1984	195	37,532	2,151	1,650
1985	290	53,951	3,272	2,524
1986	408	74,015	4,951	3,863
1987	531	87,905	6,567	4,801
1988	591	89,080	8,176	5,890
1989	563	88,658	9,057	7,502
1990	568	89,906	11,474	7,348
1991	586	90,861	12,136	7,067
1992	558	86,937	13,081	7,133
1993	536	85,621	15,821	9,326
1994	494	82,176	16,553	10,125
1995	481	80,466	18,267	10,856
1996	481	79,793	21,001	12,077
1997	480	83,391	23,049	13,880
1998	495	90,116	26,075	16,179
1999	512	91,374	28,952	15,725

(注) ただし、1999年の数値は推計値。企業数、雇用者数は12月現在の数値。

(出所) Bowman, Mauritius: *Democracy and Development in the Indian Ocean, 1991*; Central Statistical Office, *Digest of Industrial Statistics 1999, 2000*; Central Statistical Office, *Economical and Social Indicators, Issue No.33, 2000*.

4 輸出加工区製造業

—卓越する繊維産業—

モーリシャスにおいては、1960年代の輸入代替工業化政策が雇用効果を発揮できず、輸出指向工業化戦略への転換がなされた。70年に「輸出加工区法」が立法化され、翌71年に輸出加工区が設立された。表2は、71年から99年までの企業数、雇用者数、輸出入額の推移であり、輸出加工区の実績が示される。

企業数の変化をみると、1971年の9社から出発し、76年の66社まではほぼ順調に増加した。77～82年の期間は、企業増加数は少なくなり、企業数の微増期と認め得る。80年代半ばの期間になると、再び企業数の増加が著しくなり、輸出加工区の発展期といえる。88年の591社が輸出加工区企業数ではピークであり、89年以降は企業数の停滞期といえる。とりわけ、90年代に入ると、企業数は減少している。これに対して、雇用者数は、90年代の停滞・減少期においても、企業数ほどには減少せず、ほぼ横ばいの傾向である。この点に関する輸出加工区開発庁（EPZDA）の説明は、雇用規模の小さい中小企業の撤退、大企業における雇用規模の拡大というものであった。

輸出加工区における業種特性をみると、繊維系・織物および衣類などの繊維・縫製産業が圧倒的に多い。すなわち、2000年9月におけるモーリシャスの輸出加工区企業数の54.1%、雇用者数の88.0%、輸出額の79.0%は繊維・縫製産業で占められる。また、女性雇用者の比率が67.5%と高率である点も特徴である。

以上のように、輸出加工区については、繊維・衣類産業に特化し、機械組立工業は極めて少なく、産業の高度化がみられないこと、さらにマダガスカルなどへの工場移転、外国人出稼ぎ労働者の増

加がみられ、失業率が急増している点などが問題点として指摘できる。

5 観光産業

—「インド洋の貴婦人」—

モーリシャスは、美しいビーチとサンゴ礁、豪華なホテルと洗練されたサービスなど、高級海洋リゾートとして有名である。外国人観光客数は、1970年代前半は数万人規模であったが、80年代後半以降急増し、99年には57万8085人となった。99年の観光収入は136億6800万ルピー（99年末の為替レートは1米ドル=25.468モーリシャス・ルピー）であり、これはGDPの約15.4%に相当する。観光産業による直接雇用効果として、1999年のレストラン、ホテル、旅行サービス業事業所による雇用者数は合計1万7111人であり、90年と比較すると倍増している。

観光客の国・地域別内訳構成（1999年）をみると、フランス人が最も多く17万5431人で全体の30.3%を占め、以下、仏領レ・ユニオン島、イギリス、南アフリカ共和国、ドイツ、イタリアの順である。大陸別シェアでは、ヨーロッパ66%、アフリカ27%、アジア5%などとなり、モーリシャスの外国人観光客はヨーロッパ人が卓越する。なお、日本人観光客数は、近年減少傾向にあり、国別順位では20位となる2324人である。

観光客の平均宿泊日数（1999年）は、全観光客平均では10.4日であり、ヨーロッパ諸国は、ドイツおよびベルギーの13.3日を最多として、平均以上の宿泊日数を示すのに対し、日本は20国中最低の5.8日である。日本からモーリシャスへの往復には乗り継ぎなどで時間を要することを考慮しても、両者の宿泊日数の格差は大きく、このことは日本とヨーロッパにおける観光に対する考え方や慣習が大きく異なることを示唆している。

以上のように、観光産業は、経済統計からみる限り、近年も好調さを持続しているが、ホテルがビーチ保全のために投入している大量の砂がサンゴに悪影響を与えているなど、自然破壊の進行が危惧されている。とりわけ、モーリシャス随一のビーチでポスターなどにもしばしば登場する無人島のイル・オ・セルフ (Il aux Cerfs) において、昨年ゴルフ場開発が許可されたが、周辺海域の水質汚染などの問題が懸念される。

おわりに

—桃源郷モーリシャス—

最後に、モーリシャスの滞在雑感を端的に述べれば、世界にはまだこんなすばらしい国が残っていたのかという強い思いである。モーリシャスの好印象の内容を列記するならば、下記のとおりである。(1) 快適な気候 (20℃ 台前半の気温が卓越し、暖房および冷房不要)、(2) 美しい景観 (岩山、火山、滝、ビーチ、サンゴ礁など地形の多様さとそれを彩るサトウキビ畑や動植物)、(3) 多様な宗教文化 (各種宗教の平和的併存、閉鎖的ではない宗教行事とその多さ)、(4) 素朴で親切な人々 (大学関係者や役人なども世話好き、観光地では現地の人が親切心から無料で観光案内、公園に娘・息子を連れて行けばすぐ子どもたちが一緒に遊んでくれる)、(5) 多い美男・美女 (とりわけクレオール)、(6) 良い治安 (原則として夜間でも徒歩で外出可能、窃盗などの犯罪はきわめて少ない)、(7) 安定した政情 (2000年夏の総選挙でジュノウス [Jugnauth] 新政権が誕生したが、平和裡に政権交代)、(8) ものの豊富さと安さ (ヨーロッパ・南アフリカ共和国・アジア産の商品が豊富に輸入され、バザール・露店と近代的スーパー・マーケットが併存)、

(9) 多彩な飲食文化 (大学食堂でも焼きそば・焼き飯が中心メニューであり中華料理がポピュラー、その他インド料理・クレオール料理、地元産ビール・ワイン・ラムの存在)、(10) 洗練された優雅なリゾートホテル (ゴージャスな施設、サービス、食事付きで一泊1万円程度) などである。

先進国では、便利さの反面、人々は拝金主義となり、その心はすさみ、子供たちは荒れている。一方発展途上国では、純朴な人々が多いが、飢餓や貧困に苦しんでいる。モーリシャスは、両者の中庸にあって、両者の良さを併せ持っているのである。

以上、本稿で述べてきたモーリシャスの事例は、貧困に喘ぐ他のアフリカ諸国の参考にはあまりならないかも知れない。すなわち、モーリシャスの特殊性として、(1) 小国であること (政策や投資の成果が出やすい)、(2) 地元資本としてのフランス・インド・中国系資本の存在、(3) 高い国民資質 (小学校から大学まで全て無料の教育制度によって、国民が最低でも英語、仏語、クレオール語の読み書きや会話が可能)、(4) 特異な民族構成 (商売上手のインド系および中国系が卓越) などが指摘できる。しかし少なくとも、基幹産業の振興が経済発展や生活安定に直結することだけは間違いなく、多くのアフリカ諸国の場合、それは製造業や商業・サービス業よりもむしろ農業であろう。

今後は、調査資料の分析・考察により、「ポートルイスの都市発達史」、「製糖産業の史的変遷」、「輸出加工区製造業の企業特性」、「ラム・ビール・ワイン産業の産業特性」などをテーマとする研究をまとめる予定である。

(てらや・りょうじ/愛媛大学法文学部)